

歴史認識と人類学：

満鉄資料『新疆ニ於ケル楊柳青人』の分析を通じた日本帝国主義の新疆戦略

中 生 勝 美

キーワード：満鉄調査部、『新疆ニ於ケル楊柳青人』、山本斌、新疆工作

はじめに

2017年1月に、天津社会科学院の張利民教授から、南満州鉄道株式会社（以下略して満鉄と記する）の調査部に勤務していた山本斌が執筆した『新疆ニ於ケル楊柳青人』（1943年）について問い合わせがあった¹。この報告書にある楊柳青は天津近郊にある町で、伝統的な年画（新年に部屋や門に飾る伝統的版画）の産地として有名である。

この報告書は日本語で書かれているが、日本国内はもとより、中国のその他の機関にも所蔵がなく、天津社会科学院のみ2冊の所蔵が確認された。その内容は、1940年代の楊柳青商人の社会経済史を知るうえで、極めて詳細な調査内容だったので、天津社会科学院は全訳して『絲路津商』の資料集の一部に収録した。

その本が、現在中国政府が推進する中国版グローバル化の「一帯一路」政策²でにわかに注目を集め、天津テレビ局が、この資料を基に「趕大營」というドキュメンタリーを製作することになった。彼らが注目したのは『新疆ニ於ケル楊柳青人』では、1940年代に天津商人が、いかに新疆に進出し、現地で山西商人と並んで二大経済勢力になっていたかを具体的に分析しており、他に比類のない記録だった。特に報告書を執筆した山本斌は、1937年前から、満鉄調査部に在籍し、華北農村慣行調査に従事していたので、調査の背景がどのようなものか関心が高まった。華北農村慣行調査の報告書は、戦後に『中国農村慣行調査』として出版され、戦前の中国農村の社会状況を詳細に記録したものとして高い評価を得ていた。筆者は、この報告書に基づいた分析から中国研究に着手し、1980年代から、慣行調査の調査地を再訪して、この報告書に基づいた研究をしていた。華北農村慣行調査は、法社会学や歴史学の専門家が調査企画、立案、調査の実施に深くかかわっており、調査員は東京帝国大学、京都帝国大学の卒業生を中心に採用されていた。『新疆ニ於ケル楊柳青人』を執筆した山本斌は、東京帝国大学法学部を卒業しただけでなく、中国語が堪能だったので、他の調査員が通訳を介して聞き取りしかできなかったのに対して、彼は単独で直接現地調査をしていた。また彼の報告は、農民からの聞き取りから

中国農村社会の実態や農民の生活を分析しており、彼の知的背景に関心を抱いていた。

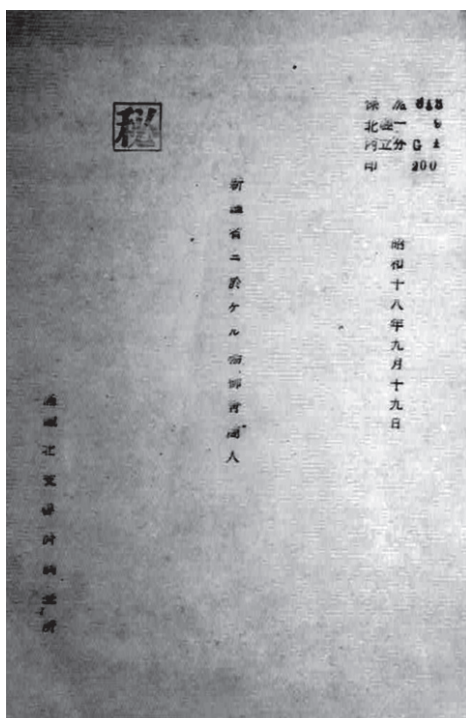
張利民教授から提示された『新疆ニ於ケル楊柳青人』を見て、この資料の時代背景、調査員の資質、日本帝国主義の内陸アジア政策、それに基づく情報戦略などから重要な資料であることが分かった。そこで本稿では、この資料を中心とする、戦前の中国における日本人の調査活動、そしてその後に残された日本語資料を批判的な検討をすることで、さらに一歩進めた日中戦争期の歴史認識についての考察を展開したい。

1 『新疆ニ於ケル楊柳青人』

天津社会科学院は、天津と新疆の経済交易を解明するために「趕大營」の資料集成を作成した。この作業の過程で、偶然に当該研究所の図書館でこの資料を見つけ出し、その詳細な内容に驚き、全文を翻訳して、資料集の中で最も重要な資料として採録した。張利民教授によると、満鉄調査部の資料は、基本的に日本軍が占領した地域が中心だけれども、楊柳青に特化して新疆との関係を詳細に調査した背景や、これほどまで詳しく調査をした調査員の力量に関して疑問が残ったという。そこで、まずこの報告書の内容を紹介しよう。

この報告書の表紙右上には、「保 No818 / 北緯 -9 / 丙立分 G1 / 印 200 / 昭和十八年九月十九日」と書誌情報が付され、かつ左上に赤字の「秘」が押印してある。前書きによると、調査者は奥田栄と山本斌で、報告書整理は奥田栄が担当したとある。この内容は次の通り。

資料1 報告書の表紙



前言

本編

第1章 楊柳青と新疆との関係

第1節 起源

第2節 現状

第3節 天津幫と山西幫

第4節 新疆省に於ける楊柳青人の分布状態

第2章 楊柳青人の活動に就て

第1節 はしがき

第2節 天津幫の分布状態

第3節 天津幫商業活動の二、三の指標に就て

第4節 綏新同業会と楊柳青商人

第5節 天津幫の取扱商品に就て

第6節 貿易額と送金方法に就て

参考編

第3章 支那本土と新疆省との貿易に就て

第1節 民国の13-15年当時の貿易統計

第2節 新疆貿易の変遷（民国10年、15年、20年の比較）

第3節 トラック並駱駝に依る貿易の比較（民国19-21年）

第4節 包頭商店の取引に就て（民国25-30年）

第5節 関係する運送方法の関連の資料

第4章 新疆省での商業会議所と商業資本

第1節 商業会と商業資本

第2節 新疆省に於ける外国資本

第5章 新疆市場に対する漢人商業資本の進出

第1節 左宗棠の新疆征討と巨大軍事費の支弁

第2節 新疆省に対する協調と其の諸影響

第3節 新疆省における塩金に就て

第6章 新疆省とロシアとの関係

第1節 はしがき

第2節 新疆ロシア間の交通路に就て

第3節 露新貿易の発展

付録 新疆を繞るロ支条約及重要事項表

1884年に新疆で発生した回民の反乱で、その翌年には清朝が完全に新疆の統治能力を喪失した。そこで同治、光緒年間に、欽差大臣で陝甘総督の左宗棠が西北遠征に赴いた作

戦を「趕大営」という。楊柳青の商人、安文忠が最初に清軍へ従軍したのは1868年であり、天津一帯の天候不順にともなう飢饉発生で、多くの楊柳青の人々が安文忠のように新疆交易に従事し、新疆一帯での商業ギルドとして存在感のある集団となった。しかし、楊柳青商人が唐突に新疆へ進出したのではない。天津が開港する以前、ロシア商人は華南産のお茶を買い付けて、馬車やラクダを使って陸路でヨーロッパまで運ばせていた。天津が開港した後も、沿海汽船で華南のお茶を天津に運び、天津―通州間の運河を民船で運送し、そこから張家口・モンゴル・中央アジアとラクダを使って、約1年かけてヨーロッパまで運んでいた（王 1988：100、天津地域史研究会編 1999：64）。このように、天津は内陸交易ルートの最終地点であり、交易を通じて、新疆情報があつたからこそ、「趕大営」に従軍して商売をする社会背景があつた。

天津社会科学院が編集した『絲路津商』は、「趕大営」に関する資料集成であり、地方の文史資料に掲載された楊柳青商人の聞き取りや回想録などを編集している。その中で、満鉄の報告書は、極めて具体的であり、楊柳青商人の活動概要を把握した資料として注目された。

この報告書の特色は、警察署が管理する6000戸あまりの戸籍を点検し、楊柳青の家族で新疆に在住する家族を探し出して聞き取りをおこなったところである。その戸籍簿には、単に「在外」とだけ書かれたものもあるが、一時居住で新疆に在住する者も含まれ、警察署が相当数の楊柳青人が新疆と往来していたことを把握していたことが分かる。当時、新疆は日本軍の勢力が及ばないため、新疆の具体的な情報を得るため、新疆に縁故者がいる家族を探し出し、総数が500～600戸あることを把握したうえで、彼らから新疆の具体的な情報を得ている。さらにかつて新疆に在住したことのある老人からも新疆の状況を聞き出しており、新疆各地での商人の商号、歴史、年商などの経営規模、資金、従業員数などを聞き出している。これらの具体的な聞き取りと、満鉄調査部にある調査資料や統計数値と総合して、新疆と天津の交易状況、送金方法、輸送状況などを分析しており、日本軍占領地と国民党統治地区との敵対する地域との交易ルートを解明しようとしている。分析に使っている統計資料は、日中戦争以前の1930年代前半のものが多く、これによって天津を中心とする沿海地帯と新疆との交易の概要がある程度把握できている。

2 調査員の山本斌について

この報告書の前言で、担当者の奥村栄と山本斌が1943年の6月、7月、8月の3回現地へ出張して調査を実施し、その取りまとめは奥村栄が担当したと書いてある。奥村栄は薛暮橋の『中国農村経済の根本的諸問題』を翻訳しており、満鉄で中国農村経済の問題を担当していたと思われる（薛 1937）。この調査で中心的な役割をしたのは、山本斌である。彼は、戦後帰国して、『中国の民間伝承』という著作を一冊だけ出版している（山本 1975）。この奥付に記された筆者紹介には、次のような経歴が記されている。

1907年山口県萩市に生まれ、1932年東京帝国大学法学部を卒業し、1932年³から33年まで同大学院で近代中国政治史を専攻し、1937年から43年まで満鉄調査部中国農村慣行調査班に所属し、1943年から45年までは満鉄北支経済調査所に所属して、青海、黄河上流の同仁、拉卜楞、循化、卓尼地方の諸民族社会、ラマ教の倉（ツアン）機構の調査資料を刊行した。1946年に帰国し、海燕書店を創業したとある。『中国農村慣行調査』『東部チベット語辞典』（以上は共著）、『中国辺境漢方薬材辞典』のほかに、ソヴィエト体育関係の訳書があると書いてある。

『中国農村慣行調査』には、山本斌の報告書が収録されているが、その他の著作の書誌情報は確認できなかった。1980年代に、筆者は『中国農村慣行調査』に参加していた旗田巍と安藤鎮正に満鉄調査部の聞き取りをしたことがあり、この時、山本斌について質問をした。旗田巍（1908-1994）は、1931年に東京帝国大学文学部東洋史学科を卒業し、満鉄調査部に入り、華北農村慣行調査に参加した。戦後は東京都立大学、専修大学に奉職し、『中国農村慣行調査』の主要な編集を担当し、『中国村落と共同体理論』で中国社会論を展開し、中国農村慣行調査の資料を用いた主要な研究者と位置づけられている。しかし、戦後の主要な研究は朝鮮史だったので、このことについて尋ねると、本来は朝鮮史で研究をしていたが、学生運動で逮捕された経験があるため一般の就職はできなくなり、満鉄調査部に採用されたのだという。当時、満鉄調査部では、左翼思想によって逮捕された経験者を大量に採用しており、満鉄調査部ではマルクス主義の著作や方法論が公然と議論される風潮があったという。安藤鎮正は、東京帝国大学法学部政治学科を卒業し、満鉄調査部に就職したが、戦後は研究者にならなかった。しかし、実質的な『中国農村慣行調査』の作業は、安藤が進めたのだという。

二人の話では、山本斌の個性が強く、なかなか同僚と協調せず、満鉄調査部で華北農村慣行調査を始めた時も、彼は単独で調査村に行つて同僚から嚮嚮を買ったこともあったという。しかし彼は語学の才能があり、中国語が自由に話せただけでなく、学生時代に英語とドイツ語を修得し、さらに北京へ赴任してからラマ廟である雍和宮に行つて、そこにいた修行僧のチベット人やモンゴル人からチベット語とモンゴル語を学び、ある程度話せるようになったのだという。また戦後帰国してから開業した書店は、代々木の日本共産党本部の前にあり、共産党のシンパであったと思われるが、ロシア語の翻訳も手掛けていた。山本斌の息子の嫁、山本久子氏によると、山本斌は満鉄に奉職中、北京の官舎が大きな屋敷で、それを半分使っていたが、残りの半分はロシア人が住んでいた。そこでロシア語をマスターしたのだという⁴。



写真1 山本斌一家（山本久子氏提供）

1943年8月20日撮影、左から山本斌（33歳）、悦治（2歳）、祐司（3歳）、成子（24歳）、岡八重子（19歳）

また、中国農村慣行調査の研究で著名な福島正夫にも、筆者は生前一度会ったことがあり、その没後に、自宅を訪ね、夫人の福島小夜子氏にインタビューをしたことがある⁵。その時に、福島正夫と山本斌の交友を尋ねた⁶。福島正夫は山本の経営していた書店に、時々立ち寄ることがあったという。福島からも、山本は有能だけど、自由人なので研究職には向かないということを知ったという。

山本は、『中国農村慣行調査』が出版された時、岩波書店の広報誌『図書』に福島正夫とともに、慣行調査の思い出を書いている。福島正夫は、慣行調査の学術的背景をまとめているのに対して（福島 1953）、山本斌は、調査のプロセスを、かなり具体的に書いている（山本 20-21）。例えば、「入村する。村公所や村長宅は事実上我々の調査のため占拠される。村公所の営む自治事務の外に、日本軍の徴発、鉄道の賦役、県公署の徴税、新民会の訓練指令等が山積し、村民全体が困惑苦吟していた時代のことで、村公所の使用丈けでも、村の理事者にとって迷惑千万なことであった。村長、副、会首連は滞在期間中事実上釘付にされ、村の扶役は聴取調査に呼出された村民の狩出しに大童であった」と、村に入ってから、その調査の対応に追われる村人の様子が克明に描かれている。調査班は、村に経済負担をかけないために接待費、調査謝礼費を用意していたが、客を大切にする中国人から過剰に接待され、「この種経費が村としては巨額に達した証拠は、村費内訳を

季末になって決算し、村民に公開するために、村公所の壁に貼られた^{カキツケ}条単に満鉄班費の一新項目があったことである。この経費が事変のためにギリギリの生活に追いこまれていた農民諸君のナゲナシの財布の底を叩かしたのである。もとよりこの条単も我々調査の対象として取上げられ、御馳走になった金の出处まで詳細に調べあげることになるのであったから、まったく驚嘆に値する程の失礼な客であったのである」と、他の調査員の回顧録には書かれていない、まさに支配者による調査の実態を書いている。その後も、調査の様子を続けているが、最後にもう一度調査村に行き長年の非礼を詫びたいと結んでいる。山本は言葉ができるがゆえに、他の調査員とは異なって農民との距離が近かったことを窺わせる。

山本斌は、著書『中国の民間伝承』のなかで、中国での経験を次のように書いている。1941年12月から満鉄調査部の仕事で華北一帯の村落概況調査をおこない、華北の多くの村落で、山西省洪洞県大槐樹を故郷にする民間伝承を聞いてきた。調査が進展し、北京近郊の順義県だけでなく、河北省の欒城県や昌黎県と広がっても、同じような伝承を聞くので、大槐樹の存在を突き止めたい思いが強くなり、ついに1941年8月に山西省を縦断する同蒲鉄道を南下して洪洞県まで行ったのだという（山本 1975：22-32）。この時の調査日誌は、『中国農村慣行調査』6巻に収録されている（中国農村慣行調査刊行会編 1981：42-58）⁷。

北支農村慣行調査では、中国農村の法慣行を調査する目的で、一つの集落を一定の期間調査して、その報告書は問答形式でまとめている。山本が担当したのは小作慣行と水利に関する慣行で、担当地域の順義県沙井村・欒城県寺北柴村・昌黎県候家営村で小作について報告書を書いているが、これらの地域は河川がない地域だったので、その後は大河川地帯の農村調査を単独でおこなったと書いている（山本 1975：242）。その水利調査が、『新疆ニ於ケル楊柳青人』の調査に結びついている。では、慣行調査に掲載された調査報告から、山本斌がおこなった水利調査の時期と場所をまとめてみよう。

1942年4-5月	河北省邢台県東汪村
1942年5月	河北省邢台県七里河
1942年6月	河北省涿県馬頭鎮
1942年9月	河北省天津県第七区小站郷
1942年11-12月	河北省南和県、任県、邢台県第三区、平郷県
1942年11月	河北省邢台県第五区孔橋村

主要な調査テーマのうち、水利慣行の調査は、用水路の管理組織、水の分配方法、水に関連する民間信仰の儀礼とその組織、水争いの調停、橋の管理組織、護岸工事と水害救済組織などを具体的にインタビューしている。その調査項目は、満鉄調査部で広く読まれていたマルクスの資本論と並ぶウィットフォーゲルの東洋的専制と水の理論⁸を基礎に作ら

れたと考えられる。

山本が邢台県を調査していた同じ時期の1942年4月から8月まで、新民会順徳道總會の小栗満宮が、水路を自営する紅槍会について詳細な聞き取りを記録している。満鉄慣行調査班が邢台県七里河河川域の水慣行調査でこの資料を入手し、その資料を『河北省順徳道慣行調査資料』第一冊として謄写印刷している。さらに『河北省順徳道慣行調査資料』第二冊で河南省と山東省の紅槍会についての文献資料をまとめている。

山本斌が担当した水利関係の調査は、慣行調査の主要な調査村とは異なり、水利に伴う村落の法慣行に加えて、運河の維持修理、水運業者を襲う盗賊団から身を守る自警団組織や秘密結社に関する調査も関係してくる。貨物運送に従事する組織を天津では「脚行」と称した。近代の天津では、華北一帯の水陸交通の要所なので、脚行が大変発達した。天津が解放された時、脚行は大小合わせて227家、頭目の「把頭」は約3000人、その雇用労働者である脚夫は17000人余りだったという。脚夫は貧困層の民衆で、彼らを統率して管理する頭目は、無頼の素質を持った人物で、民国初年の軍閥の戦乱と社会不安が続く中で、天津の無頼集団は勢力を伸ばしたが、徐々に堅固な組織を持った秘密結社の青幫にとってかわられた（天津地域史研究会編 1999：175）。

この秘密結社に関する報告は満鉄調査にもあるが、基本的に非公開の報告書になっている。満鉄調査部の仕事でも、関東軍や北支駐屯軍が管轄する領域の調査を委託される場合があり、山本斌が従事した水利関係の調査は、特務機関の領域に極めて近いものだった。満州事変後に満洲国建国を画策した日本軍部が1931年11月に引き起こした「天津便衣隊暴乱」を主導したのは特務の土肥原賢二たちで、彼は天津青幫の有力者の袁文会と結託して、不良や秘密結社員を便衣隊にしたてて暴乱を起こした。このように、特務機関が謀略を実行するために青幫へ加入する事例が多かったという。そして1942年に日本軍部は内河航運で青幫をさらに利用しようとして、天津青幫を網羅した天津安清幫道義總會を設立した（天津地域史研究会編 1999：181-183、渡辺惇 1998：357-358）。上述の水路を自営する紅槍会についての詳細な聞き取りをしたのも、新民会順徳道總會の日本人顧問なので、青幫と同様に秘密結社に分類される紅槍会の調査も、こうした情報機関の活動の一環と言える。

学術的な目的で開始された華北農村慣行調査も、戦況の悪化に伴い、計画当初の長期的な調査は不可能となって1943年には慣行調査班自体が解散となり、山本斌は終戦まで満鉄北支経済調査所に移籍した。その後のことについて、山本はほとんど書いていないが、1943年5月末から内蒙古のラマ廟を調査した長尾雅人は、同年6月6日に北京で調査準備の会合の席上で山本斌に会ったと記している。長尾は、回想録で、山本斌と中村九一郎⁹が約1ヶ月間、蒙疆政府興蒙委員会の蒙疆建設隊として、錫林郭勒盟一帯を調査するので、チベット史研究者の佐藤長が同行することになったと記している（長尾 1987：30）。このことから、山本が楊柳青で調査をしたのは、この内蒙古の調査と時期が重なっており、この調査の前後に、短期間で天津調査をしたことになる。

山本の履歴からも、満鉄北支経済調査所での仕事は青海省・甘肅省における民族関係の調査であり、著書の巻末に書いてある「黄河上流の同仁、拉ト楞、循化、卓尼地方」を現在の地名で表すと、同仁（チベット語でレプゴン）は青海省甘南チベット族自治州、拉ト楞（ラブラン）は甘肅省甘南チベット族自治州夏河県、循化（サラール）は循化サラール族自治县、卓尼（チャオニ）は甘肅省甘南チベット族自治州である。これらの地域に住む少数民族は、チベット族、及びイスラーム系のサラール族である。当時の状況から、山本は直接これらの地域で調査をすることなど不可能であり、日本軍の勢力地域である蒙疆政権の支配地域での調査、あるいは『新疆ニ於ケル楊柳青人』にあるように、内陸部とつながりのある沿海地域の商業ネットワークの調査から、こうした内陸部の情報を集めていたことが分かる。このように、山本の調査は「西北工作」と呼ばれる援蒋ルートの実態を把握するための基礎作業が、この時期の主な調査であったことが窺える。では、1940年代の新疆工作の大枠は、いったいどのようになっていたのだろうか。

3 日本帝国の新疆工作

日本のイスラーム研究が、いかに中国大陸侵略と密接な関係があり、傀儡政権「満洲国」に次いで蒙疆政権が擁立され、甘肅・新疆にムスリム傀儡国家を画策していたことは、拙著『近代日本の人類学史』第7章のイスラーム研究とムスリム工作で詳細に分析している。

関東軍は、満洲国を独立させた翌年の1933年に熱河省を占領し、1938年に蒙古連合自治政府を成立させ、次の段階で青海、新疆まで勢力を延ばし、西の同盟国ドイツとバグダッドで手を結んで、仮想敵国のソ連を封じ込める構想をもっていた。新疆に親日傀儡政権を樹立する戦略について、中国側の資料では「回回国独立の陰謀」と表現しており¹⁰、アメリカ OSS 資料も同様の指摘をしている¹¹。

日本の内陸アジア工作を理解するために、1930年代の中央アジアの状況を把握しておかねばならない。1931年3月に、新疆省政府主席の金樹仁（1879-1941）が権力掌握を意図して改革を断行しようとし、それに反対したウイグル農民がハミ蜂起を起こした。これをきっかけに、第1次民族独立運動が始まり、11月に「東トルキスタン・イスラム共和国」が成立した。ハミ蜂起は、当初から反漢族感情の民族独立運動が原因であった（王1995：11-12）。1933年4月に新疆省ウルムチで政変が起き、金樹仁を継いだ盛世才（1897-1970）が最高指導者となった¹²。1935年に、蒋介石はソ連に対して、武器弾薬の提供を受けるため中ソ軍事協定の締結を打診している。そして1937年の中ソ会談でソ連から中国へ援助物資を送ることが決まり、アルマトイ（カザフスタン）ーイリ（新疆省）ーウルムチーハミー甘肅省蘭州のルートで搬送された（王1995：39）。盛世才は中国東北方出身で、日本に留学経験があったけれども、徹底した反日感情を持っていたので親ソ路線をとった。日本の戦略は1938年から明確にした「援蒋ルート遮断」作戦である。

軍事史の分野からも、1935年半ばより関東軍が華北工作と併行して内蒙古政策を積極

的に推進し始めたことが明らかになっている。特に東路(満洲国)・中央路(外蒙古・内蒙古)・西路(新疆省)の「コモンテルン・ルート」によって浸透してくる「赤化工作」を防御するため、満洲国から華北・内蒙古に続く「防共障壁」を設定する構想は、陸軍が熱心であった。そこで関東軍の内蒙古工作の重点が、初期は満洲国西境地の安定と、対ソ諜報・謀略基地の育成に向けられたが、西ウジムチンの索王工作を経て徳王の掌握に見通しがついでから傀儡政権の蒙疆政府擁立により、内蒙古を中国本土から分離し、さらに青海省・新疆省・外蒙古へ拡大する構想を持った。この時期、外国でも日本が内蒙古―外蒙古、あるいは内蒙古―新疆ラインを通して対ソ攻撃や領土拡張を計るものと予測していた。これは関東軍の西北工作の構想をかなり正確に把握していた(秦 1961: 88-89)。

満洲国からトルキスタンに至りドイツと連携を想定する防共回廊の建設という関東軍構想は「昭和11年関東軍謀略計画」に書かれていた。これには、次の8つの工作が列挙されている。1 青海工作、2 新疆工作、3 欧亜連絡航空路基地の設定、4 外蒙工作、5 西蒙工作、6 内蒙古工作、7 対中国工作、8 東北軍および陝西省土着軍への工作。この中で、具体的なものは日独の欧亜連絡航空路の協議が進み、包頭―カブールの連絡中継地としてホータンと安西があげられ、さしあたり安西にガソリンを集積する計画を進め、1935年末にオチナ機関が開設され、翌年秋に飛行場を建設した。しかし、1937年7月に日本軍のシルクロード最前線であるオチナ特務機関が、国民党軍の攻撃をうけて壊滅状態となった(秦 1961: 91-92) その後も1940年3月に包頭から西300kmで国民党の溥作義軍と対峙した広原作戦で日本軍が敗退したことで、日本軍の新疆侵攻作戦は頓挫した。

1944年には、ムスリム工作に従事していた工作人員のほとんどが徴兵され、活動停止の状態に陥った(小村 1988: 118-120)。小村不二男は、1943年に内蒙古地帯のムスリム工作は終焉したと書いているが、後方攪乱作戦としてのムスリム工作は継続していた。つまり軍事作戦からプロパガンダ作戦へ変更して援蒋ルートを遮断する作戦は継続していた。そこで、こうした歴史的背景から、この『新疆ニ於ケル楊柳青人』で調査された内容を見てみよう。

第2章の楊柳青商人の活動で、新疆省の楊柳青商人の数は、ウルムチ約60軒、イリ約40軒、塔城¹³約50軒、アスク¹⁴約20軒の総計約170軒で、そのうち35軒は商号・代表者名、設立年、本店所在地、分店所在地、資本金、年額取引額、従業員数などが判明して一覧表になっている(32-36)。盧溝橋事変前の厚和(フフホト)の同業組合は、全部で80軒が加盟していたが、天津幫(=楊柳青商人)が62軒と圧倒的に多く、山西商人をはるかに上回っていた(38)。このように、日本軍の勢力地域での詳細な調査をもとに、新疆での楊柳青商人の優勢を推測している。第3章第4節の包頭売店の取引についても、同じ手法で包頭に搬入してくる天津商品の分析をしており、西北貿易の推定に利用している。

そして、天津から新疆へ移出する商品は絹緞・布疋・鞋帽・海棠¹⁵・雑貨・化粧品・茶・

砂糖・顔料・海産品・玩具・梅紅紙で、新疆から天津に移入される商品は、綿花・薬材・ブドウ・狐皮・羊皮・羊毛・ラクダの毛・ラクダの皮・貝母¹⁶・羊腸子・旱獭皮¹⁷・鹿茸¹⁸・金・黒羔皮¹⁹である。これらの1軒あたり1年平均の貿易額は、移出が7～8万円、移入が3万円で、170軒として年額17000万円の商品取引があると推定している(47)。ヒヤリングによって、新疆で成功した8軒の楊柳青商人の商号を聞いており、民国甲戌年(1934年)に修復された楊柳青の葉王廟の寄付金を刻んだ碑文にも、この8軒の商号があることを確認している(49)。

この報告書で重要なのは、1940年代の新疆内部での経済活動の情報である。これが第4章で、新疆の商務会と彼らの紛争仲裁の分析で、商会在新疆の大都市(ウルムチ=迪化、イリ=伊犁、タルバガタイ地区=塔城)に存在し、現地の中国人・ウイグル人・タタール人、ロシア人が加入していて、商取引関係でおきる紛争で、賠償請求の仲裁をしていたと指摘している。各地の漢族以外の有力者の名前と彼らの経営する商店名、経営内容は、「スミグノフより聴取」とロシア人と思える人物からの聞き取りで明らかにしている。

この部分で注目できるのは、大商人以外は独立して外国の貿易取引ができず、代理商として新疆省内の僻地に人を派遣して流通網を張っていたということである。そして新疆省では、失敗した商人資本を吸収合併される傾向が著しく、個々の商品が独占的に販売されていた。特に新疆の商業資本は政府関係者に密接な関係があり、新疆の一部行政官は、取引商会の株主とか直接の所有者になっていた。楊柳青商人の成功者、文豊泰の経営者である安蓋臣は、新疆省官錢局の総辦(支配人)で、2年の任期期間中に100万円の蓄財をして貿易を始め、二番目に成功した楊柳青商人と言われた周玉峰は、同盛和を経営し、官錢局の総辦の友人で、官と密接に結びついて200万円の財を成したという(47)。こうした有力者が個別の商品の専売権を独占し、商業資本と行政権を融合させて経済力を強化し、彼らの資本は牧畜と土地所有に投資されて、多数の商人が大土地と膨大な家畜の所有者になっているのが新疆の特色だと分析している(77)。

第5章の新疆市場に対する漢人商業資本の進出については、左宗棠の新疆遠征とその経営について『左宗棠と新疆問題』(西田 1942)に基づいて記述している。本来、この報告書で最も重要になるのは、最終章の新疆省とロシアの関係であるけれど、この部分は公開情報と、古い統計に基づく記述で終わっている。この章の最初で、オーエン・ラティモアの本の新疆と外国の関係を引用しつつ、新疆とロシアの交通路について、中蘇公路、あるいは甘新公路が援蔣ルートとして注目され、かつロシアのトルクシブ鉄道(1930年完成)の利用を記述しているが、いずれも公開情報に基づいた分析にとどまり、善隣協会調査部の『赤化線上の蒙古と新疆：支那辺境の諸問題』(善隣協会調査部編 1935)²⁰や『現代新疆』(ネダーチン 1935)²¹を参考にして、少し古い統計資料を分析しているに過ぎない²²。

第5章と第6章の部分は、それまでの章で特徴的な聞き取りを中心に新疆情報をまとめたものではなく、既存の公開資料や報告書をまとめる手法から、山本斌が担当したのでは

なく、資料を整理した奥村栄が執筆したのではないかと思われる。もつとも、山本が担当していたとしても、新疆に滞在したことのある楊柳青商人からの聞き取りのみでは限界があり、たとえ特殊任務を帯びて新疆に潜入した諜報員がいたとしても²³、満鉄調査部の報告書としては、ここまでが限界であった。

むすびにかえて

本稿は、『新疆ニ於ケル楊柳青人』を取り上げ、日本語資料の民族誌の評価と限界を分析してきた。日本の中国研究の特徴は、資料の詳細さにある。満鉄調査は、基本的に日本軍の勢力範囲内で実施され、警察と軍隊の支配を背景に実施されてきた。第二次世界大戦は、総力戦であった。そこですべての国力を戦争のために動員したのであり、学術界もその例外ではなかった。

情報収集は、社会科学の重要な作業である。インドや香港を研究する場合は、そこを統治したイギリスの植民地資料を利用し、ベトナム研究ではフランスの調査資料を参考せざるを得ない。満鉄資料は、一種の重要な資料である。しかし、こうした植民地資料には、その資料が内包する性質と制約がある。満鉄資料のような植民地資料を活用する場合、その歴史的背景を考察し、その資料が持つ政治的要素の制約を勘案するならば、その民族誌的資料は歴史資料として利用できる。そこで、植民地資料として残された資料を、いかに歴史の文脈から読み解き、それを現在に生かすかという問題は、単に分析された資料の詳細さのみでなく、それが生み出された背景も含めた総合的評価が必要である。とくに、日本の内陸アジア戦略は、戦後の視点から見ると、大東亜共栄圏の構想の下に、実現不可能な誇大な戦略と思えても、当時は実現に向けて真摯な調査活動が行われていたのである。その意味でも、実現できなかった戦略も含めた歴史像の構築が、本稿で分析した調査報告の背景を理解する上で必要であることを最後に強調しておきたい。

本稿は、2017年10月22日に大連で開催された中国芸術人類学会での発表原稿「历史认识与人类学：以满铁资料《杨柳青人在新疆》分析日本帝国侵入新疆战略」に手を入れたものである。発表は中国語でおこない、当日配布された『2017年中国芸術人類学国際学術研究討会 論文專輯』は中国語で掲載したが、口頭発表に対する質疑応答によって補充して本稿を完成させた。2017年2月の天津調査は天津テレビ局から招聘していただき、楊柳青での調査が可能となった。天津テレビ局の製作したドキュメンタリー「趕大營」は、製作を終えて放送のための審査を待っている（2018年1月段階）。また筆者にこの企画をもちかけてくれた張利民元天津市社会科学院所長に感謝の意を表したい。

参考文献 () 初版年

[日本語]

ウィットフォーゲル著、森谷克巳、平野義太郎訳編

1939a 『東洋的社會の理論』東京：日本評論社

ウィットフォーゲル著、平野義太郎監訳

1939b 『解体過程にある支那の經濟と社会：アジア的ない大農業社會に対する科学的分析の企圖
特にその生産諸力・生産＝流通過程』上下巻、東京：中央公論社

ウィットフォーゲル著、湯浅赳男訳

1991 『オリエンタル・デスポティズム：専制官僚國家の生成と崩壊』東京：新評論

王柯

1995 『東トルキスタン共和国研究：中国のイスラムと民族問題』東京：東京大学出版会
大阪経大会編

1985 『巡政民 中村九一郎教授古稀記念号 大阪経大論集』164号

小林不二男

1988 『日本イスラーム史』東京：日本イスラーム友好連盟

薛暮橋著、奥村栄訳；満鉄産業部 [編]

1937 『中国農村經濟の根本的諸問題』(産業調査資料：第31編) 大連：南滿州鉄道

田中清次郎

1941 「東亜研究叢書の刊行に就いて」シロコゴロフ著、川久保悌郎・田中克己訳 『北方ツングースの社会構成』東京：岩波書店

中国農村慣行調査刊行会編

1981 (1958) 『中国農村慣行調査』第6巻、東京：岩波書店

天津地域史研究会編

1999 『天津史』東京：東方書店

中生勝美

1987 「『中国農村慣行調査』の限界と有効性」『アジア經濟』28巻6号、33-46

1995 「書評 福島正夫著作集 第7巻 法と歴史と社会とI」『アジア經濟』36巻5号、84-88

2016 『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』東京：風響社

2017 「历史认识与人类学；以满铁资料《杨柳青人在新疆》分析日本帝国侵入新疆战略」2017年
中国芸術人類学国際學術研究討会 論文專輯』815-821

— 「戦前の内蒙古における日本の特務機関：アバカ機関の事例を中心に」『モンゴル国際シンポジウム』桜美林大学 (印刷中)

中村九一郎

1955 「毛沢東の思想—第二次国内革命戦争の時期を中心として」『大阪經濟大学』13号、73-92

中村九一郎先生傘壽記念誌編集委員会編

1997 『九一傘壽記念誌』尼崎：中村九一郎先生傘壽記念誌編集委員会

長尾雅人

1987 『蒙古ラマ廟記』東京：中央公論社

西田保

1942 『左宗棠と新疆問題』東京：博文館

ネダーチン、C.B. 著、中平亮訳

1935 『現代新疆』(経調資料、第79篇) 南滿州鉄道

旗田巍

1973 『中国村落と共同体理論』東京：岩波書店

秦郁彦

1961 「綏遠事件：日本外交史研究 日中關係の展開」『國際政治』15号、87-102

福島正夫

1953 「中国農村慣行調査について」『図書』41号、18-20

福島正夫著、福島小夜子編

1993 『福島正夫著作集 第7巻 法と歴史と社会とI』東京：勁草書房

満鉄北支経済調査所

1942a 『河北省順徳道慣行調査資料』(一)、出版地不明：満鉄北支経済調査所

1942b 『河北省順徳道慣行調査資料』(二)、出版地不明：満鉄北支経済調査所

三谷孝編

1999 『中国農村変革と家族・村落・国家：華北農村調査の記録』第1巻、東京：汲古書院

2000 『中国農村変革と家族・村落・国家：華北農村調査の記録』第2巻、東京：汲古書院

蒙古善隣協会

1962 (1940) 『歴史上より観たる西北ルート』出版地不明：出版社不明

山本斌

1953 「中国農村慣行調査と農民」『図書』41号、20-21

1975 『中国の民間伝承』東京：太平出版社

善隣協会調査部編

1935 『赤化線上の蒙古と新疆：支那辺境の諸問題』東京：日本公論社

渡辺惇

1998 「近代天津の幫会」『駒澤史学』52号、331-367

[中国語]

天津市口述史研究会・天津市西青区政協編

2014 『絲路津商：「趕大營」資料汇编』天津：天津人民出版社

邱樹森編

1996 『中国回族史』下、寧夏：寧夏人民出版社

魏宏運・三谷孝主編

2012a 『二十世紀華北農村調査記録』第1巻、北京：社会科学文献出版社

2012b 『二十世紀華北農村調査記録』第2巻、北京：社会科学文献出版社

2012c 『二十世紀華北農村調査記録』第3巻、北京：社会科学文献出版社

王柯

2013 『東突厥斯坦独立運動：1930年代至1940年代』香港：香港中文大学出版社

王樹才主編

1988 『河北省航運史』北京：人民交通出版社 国立民族学博物館 情報管理施設 AF12/684/カホク C890543110

張思

2012 『二十世紀華北農村調査記録』第4巻、北京：社会科学文献出版社

注

- 1 張利民名誉教授とは、1990年代に、河北・山東省の中国農村慣行調査で採録された村を共同で再調査したことがある。その時の成果は次の通り（三谷編 1999、2000）。ちなみに、この時の調査報告は、中国語版が出版された（魏・三谷主編 2012a、2012b、2012c）。
- 2 「一帯一路」政策とは、2014年11月に中国で開催されたアジア太平洋経済協力（APEC）首脳会議で提唱された中国の国際戦略で、中国の経済・外交圏構想として各国にアピールされた。中国西部-中央アジア-欧州を結ぶ「シルクロード経済帯」（一帯）と、中国沿岸部-東南アジア-インド-アフリカ-中東-欧州と連なる「21世紀海上シルクロード」（一路）を統合する、ゆる

- やかな経済協力関係を構築するという国家的戦略。
- 3 山本の著作の巻末にある紹介では1931年となっているが、東京帝国大学の卒業名簿では法学部政治学科1932年3月卒業に「山本斌 山口」と出ているので、この部分を訂正した。『東京帝国大学卒業生氏名録』（東京帝国大学、1939年）141頁。
 - 4 山本久子氏は、山本斌の長男、祐司の配偶者で、2017年11月10日に取材した。
 - 5 この時、福島正夫が東亜研究所の慣行調査班に勤務し、中国の調査に出張していた時に記録した日記を見せていただいた。その後、その日記は福島正夫著作集に収録され、この時の縁で、その巻の書評を書かせていただいた（中生 1995）。
 - 6 中国農村慣行調査が岩波書店から刊行され始めた時、福島と山本は、岩波書店の雑誌『図書』の同じ号に、中国農村慣行調査の思い出を寄稿している（福島 1953、山本 1953）。福島は、企画者の東亜研究所に所属していた立場から、調査の企画経緯と全体像を紹介しているが、山本は現地での調査の実体験を書いている。農村に集団で入り、村公所を占拠して聞き取り調査をしたので、村長や村人に迷惑をかけ、かつ客人として接待するため多大な経済負担を負わせ、村から帰るときに、村中の卵をかき集めてお土産にされるなど気を遣われたなどを書いている。
 - 7 これによると、山本斌は塩見金五郎と同行して1941年7月29日に北京を出発し、太原・大谷県・介休県・忻県の県城で、その地域の概況を聞いた記録だけしか報告していない。洪洞県で大槐樹のある集落に行ったことは報告書として提出していない。
 - 8 ウィットフォーゲルは、フランクフルト学派の一員で、戦前に中国社会をマルクスのアジア的生産様式論を発展させて分析した研究として多くの日本語翻訳があり、『東洋的社會の理論』（1939a）、『解体過程にある支那の経済と社会』（1939b）などは満鉄調査部で影響力が大きかった。
 - 9 中村九一郎の年譜によると、1939年に東京帝国大学文学部哲学科を卒業し、引き続き大学院に進学したが、満鉄・東亜経済調査局の嘱託として1939年から40年までの大半を満鉄大連本社調査部で資料調査に従事した。この時、平野義太郎の助手としてシロコゴロフの『北方ツングースの社会構成』の翻訳の手伝いと、原稿の受け取りなどで満洲に出掛けていた。ちなみに、平野義太郎は、この本の翻訳ではなく、満鉄調査部の東亜研究叢書刊行会の庶務幹事を担当していて、外国語文献の翻訳出版の企画をしていた（田中 1941：3）。中村は1941年3月に大学院を修了と同時に、満鉄大連本社調査部に入社し、同年9月に満鉄北京経済調査所西北班に転勤し、中国西北地区の政治・地理・民族の調査に従事した。この時期、北京司令部の甲一八〇〇部隊地理班に出向し、西北地区の地図をヘディンのレポートにある地図を拡大して、その中に地域情報を書きこむ仕事をしていたが、1941年6月の独ソ戦開戦によって、この部隊の西北班が解散して、大連本社の民族班に所属が変わり、1942年2月に満鉄を退社している。中村の回想では、1941年9月に帰国したとあるので、彼は帰国してから満鉄を退社したことになる。中村は、1943年9月から東北大学法文学部の研究助手になっている。（中村九一郎先生傘壽記念誌編集委員会編1997：8、28-35）。中村の年譜と対照すると、山本と一緒に1943年6月に山西省に調査に行ったのは、満鉄を退職して東北大学に就職するまでの期間であり、何らかの形で嘱託になって満鉄の仕事を継続していたと考えられる。中村は、1947年に引き揚げてから1948年に旧制大阪経済専門学校講師となり、49年から新制大阪経済大学助教授となり、1990年まで奉職した。研究業績としては毛沢東思想についての論文が1本あるにすぎない（中村 1955）。
 - 10 1938年に日本のオチナ特務機関を攻撃して獲得された文献から西北地域に「回回国」建国をする陰謀が発覚して、民族対立を煽る戦略に中国共産党と国民党双方が注意を払った（邱 1996：806-812）
 - 11 オーエン・ラティモア（Owen Lattimore, 1900-1989）は、戦時中に戦時情報局（Office of War Information）に勤務しており、日本の民族分断政策に極めて批判的な分析をしていた。
 - 12 王柯は、日本の新疆進出に関して、新疆にソ連の勢力が及ぶことを恐れて情報収集を始め、日本はソ連が直接の領土要求を持ち出さないまでも、満蒙の「特殊権益」と「特殊地位」への脅威を

- 与えることを懸念して新疆に注目していた、と評価している（王 1995：34-36）。しかし、日本の新疆に対する関心は対中国よりも、対ソ関係で見べきである。
- 13 現在の新疆ウイグル自治区イリ・カザフ自治州タルバガタイ地区にある県。
 - 14 現在の新疆ウイグル自治区西部の地区。
 - 15 かいどう。バラ科の落葉小高木で、庭木や盆栽として、果実は球形で黄熟して食べられる。
 - 16 アミガサユリ。薬材に使われる。
 - 17 マーモット。齧歯目リス科マーモット属 (Marmota) に分類される動物の総称。
 - 18 ロクジョウ。鹿の角。薬材に使われる。
 - 19 子羊の皮。
 - 20 本書は、1935年までの内蒙古・モンゴル人民共和国・新疆・チベットをめぐる地域事情と地政学を概観した著作だが、当時の善隣協会調査部のインテリジェンスの能力を示すもので、各地の道路交通網や交易状況をコンパクトにまとめている。
 - 21 本書の著者、C.B. ネダーチンは、1886年生まれで、1903年サンクトペテルブルク大学東洋語科に入学し、東洋語と歴史・考古学を学んだあと、外務省に勤務し、1917年から外交官として、その後は新疆省税関外国課検査官として新疆に15年滞在していた。この本は、彼が満鉄経済調査会調査員の身分を得て、彼の新疆で知りえた地域事情、経済概況、1931年から34年にかけてのムスリムの反乱についての状況を詳細に記録したものである。
 - 22 ロシアから新疆に至るシルクロードの歴史的に利用されてきたルートは、1940年代にも継続して利用されてきたので、善隣協会調査部は、後藤富男部長を中心に西北ルートに関する紀行文、漢籍、諸民族文献に現れた新疆地方の都市・駅舎を共同作業でまとめて「歴史上より観たる西北ルート」として印刷した。この前書きによると蒙古善隣協会が1940年11月に駐蒙軍の委嘱により研究し、軍司令部の内部関係者に配布された。
 - 23 筆者がインタビューをした特務機関員の小中勝利氏は、1943年に新疆省へモンゴル人に仮装して潜入し、天山山脈の南部でドイツと満洲国を結ぶ飛行場を建設するための適地を調査したので、まったく新疆に入れなかったわけではなかった。しかし、そうした情報は、軍部のみに止まり、満鉄調査部までは伝わることはなかった。